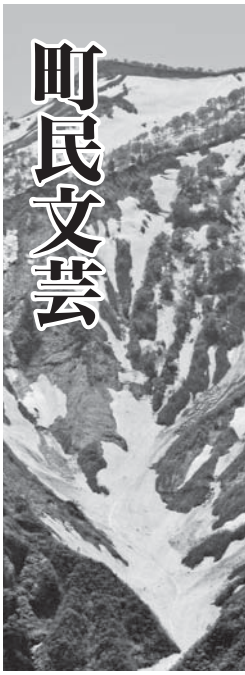

只見短歌会　四月詠草

大塚栄一　指導

春来れば吾百姓に目ざめしか友来る毎に種など配りて　馬場　八智

爽やかな挨拶かはし高校生ら自転車を漕ぐ春風のなか　関谷登美子

何するとなく過ごしたる雨の日のひと日を思ひ後ろめたしも　小倉キミ子

雪消えの庭木の手入れに暇(いとま)なく疲れのしるく足腰痛む　渡部ゆき子

花の種蒔きし立て札に幼子の覚へたてなる字が笑ひをり　目黒　富子

ふきのとう施設の人らと摘み行くにわれより脚力つよきに驚く　飯島小百合

老い母のショートステイの支度するに飼ひ猫不安げにわが顔見上ぐ　新国由紀子

残雪の隙間にのぞく雑草か緑黄色の日毎色増す　渡部ヨリ子

純白の八重の石南花(しゃくなげ)朝日差す出窓に孫はさりげなく置く　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　五月例会

目黒十一　指導

野に出よと園児に告げよいぬふぐり　信

山あいの村に人なし藤の花　一穂

子も孫も浴びた盥に種浸す　一

夏の宿納豆巻の好きな母　修

ポケットは小銭重たく春コート　都

泥んこの野球少年春の虹　一

笑顔連れ田植え休みの村旅行　一

五月晴れ北へ流るる雲二つ　一

風立ちて木筆薫るや空の青　味代子

春光や母子手帳うけ颯爽と　吉児

考妣の慈愛の百寿花万朶　吉

花莫産や頭テンテンバイバイも　吉

遠き日の開墾跡や谷うつぎ　弘子

麦わら帽案山子にゆずり買い替えぬ　弘

酸葉食み少国民の腹痩せし　幸生

吾も醒め蛙も覚めて畑を打つ　幸

薄日射す斑雪踏みしむ雑木林　礼

ひとところ尾根を動かぬ夕霞　礼

病院の自動ドア出る昭和の日　恒夫

病窓の飯豊きらりと夏きざす　恒